

南半球便り（その 90）：女王陛下とオーストラリア

9 月 20 日

英国エリザベス女王逝去のニュースは、世界中を駆け巡りました。最も大きな反響を呼んだ国の一つがオーストラリアであることは、日本では余り知られていないようですね。今日は、そのあたりをご説明します。



（出典：豪州首相府ホームページ）

1. 元首は英国国王（女王）

日本にいる方から時々聞かれるのは、「豪州では誰が国家元首なのか？」という質問です。そう、首相もいれば総督もいるので、どちらかが元首なのだろうと推測する向きも多いようです。

実際には、英国国王（女王）が豪州の国家元首なのです。キャンベラに居を構える総督は、国王の名代として豪州に常駐するとの位置づけ。英国の植民地であった歴史からくるものです。

いささか複雑なのは、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州などの各州にも総督が置かれていること。州ごとの総督は Governor、キャンベラにいて豪州全体を統括する総督は Governor-General と呼ばれています。

2. 豪州との紐帯

エリザベス女王と豪州とは深い結びつきがありました。1954 年 2 月に在位中の英国国王（女王）として始めて豪州を訪問され、8 週間にわたって滞在。シドニー湾にローヤル・ヨットで到着した際には、100 万人ものオーギーから大歓迎を受けたとの話が伝えられています。



1954 年の初の訪豪の際、ニューサウスウェールズ州議会で
(出典：ニューサウスウェールズ州議会ホームページ)

その後も、度々豪州を訪れ、70 年間に及ぶエリザベス女王の御代を通じて豪州訪問は総計 16 回に。この訪問数を聞くにつけ、10 年ほど前の英国在勤中、当時まで英国外相が 10 年以上の長きにわたって豪州を訪問することがなかったと聞かされた話との対比が印象的です。

思いは双方向。豪州社会の中に王室への愛着と思慕を強く抱いている人々がいるのと同様、王室側の豪州へのそれも強いからこそ、維持されてきた関係と見受けられます。ちなみに、エリザベス女王を継いだチャールズ国王については、高校在学中に豪州に滞在し大ファンとなり、一時は豪州国王になることさえ取り沙汰されていたと豪州マスコミで報じられています。

3. 豪英米関係

ここまで書くと、「豪州は米国の最も親密な同盟国ではなかったのか？」として、英米

のどちらと近いのか？と質問される方もいるでしょう。「関係の性格は違うものの、両方。」という答えが正確でしょう。

豪州の政治学者、歴史家が多く指摘するのは、1942 年のシンガポール陥落をもって豪州の国防、安全保障上の最重要パートナーが英国から米国に代わったとの評価です。

こうした国際社会における地政学的な構図の変化に応じて、国家間の関係が変遷してきたことは事実です。その一方で、英国との歴史的、文化的、血脈的なつながりがいまなお太いことは、豪州人と接していると折に触れて感じます。

例えば、アボット元首相、ターンブル元首相の双方とも、いわゆるローズ奨学生でオックスフォード留学組。さる情報機関の大幹部と話していたら、私が尊敬して付き合ってきた英国秘密情報庁 (MI6) の元長官は、同人の従兄弟である由。豪州人は米国人を称して、時々「従兄弟」という表現を使いますが、豪英では実際の従兄弟が国家の中枢にいます (笑)。

社交の場で話していても、休暇の滞在先として、ニューヨークよりもロンドンに惹かれる有力者が多い印象があります。「互いに風刺 (irony) を解するから。」と説明してくれた高官もいます。スポーツでも、クリケット、ラグビー、サッカーなど、豪英間で競い合うものには事欠きません。

最近の世論調査を見ても、豪州人が最も好感を持つ国がニュージーランド、カナダと英国であるとの結果が出ています (ちなみに、その次は日本です)。エリザベス女王の逝去という歴史的な節目に接し、こうした心情が前面に横溢してきたように見受けられます。



2022 年ローウィー研究所による世論調査。

他国に対する豪修辞の親近感を温度計で表示

4. 手厚い対応

このように見てくると、9月19日のエリザベス女王の国葬にアルバニージ首相とハーレー総督の双方が出席されること、豪州帰国後の22日が休日に指定され、同日に豪州での式典が行われるといった手厚い対応の背景がご理解いただけるでしょう。

エリザベス女王逝去に当たって、豪州での外国大使における弔問記帳の受付は、英国大使館ではなく豪州の総督公邸で行われました。

女王陛下について、私には特別な思い出があります。10年ほど前にロンドンの大使館で政務公使を務めていた際、林景一大使（後の最高裁判事）の信任状捧呈式に同行し、バッキンガム宮殿において一対一でお言葉を拝聴する機会に恵まれたのです。



豪州連邦議事堂内クィーンズ・テラスの献花

その際に垣間見ることができた、分け隔てのない率直な接し方、旺盛な知的好奇心、絶妙のユーモアとウィットを想起し、衷心よりお悔やみを申し上げるとともに、心を込めて記帳いたしました。

まさに、70年にわたって女王の重責を果たされてきたからこそ、英国、豪州さらには日本を越えた国際社会全体において、一つの時代の終わりと受け止められているのだと思います。

5. 共和制論議

エリザベス女王のお人柄と高い声評がその死を悼む豪州での反応につながったことは間違いありません。ある有力政治家から、「与党労働党の政治家の大半は共和制論者だが、女王が特別な存在であったことは誰しもが認めるところ。」と吐露されたことがあります。裏から言うと、後継のチャールズ国王の下では共和制に向けた議論が再び高まるとの指摘が見られます。

共和制論とは、単純化して言えば、「自分たちで元首を選べないのはおかしい。成熟した豪州としては、英国国王（女王）に代わって大統領を豪州の元首とすべき。」という議論です。ただし、大統領を国民の直接選挙で選ぶのか、豪州連邦議会で選出して任命

するのかといった具体論になると、意見は分かれるようです。

この問題は、今に始まったものではありません。1990 年代に豪州国内で激しい議論が交わされ、1999 年に実施された国民投票では、現状の君主制維持が 55%、共和制に向けた憲法改正を求める人が 45%であった経緯があります。今年 9 月に行われた世論調査でも、君主制賛成が 60%、共和制賛成が 40%であったとのこと。

共和制論者の中からは、豪州の国旗から、英国国旗であるユニオン・ジャックのデザインを外すべき、豪州の紙幣に英国国王の肖像を載せるべきではないといった主張すら聞かれます。共和制論者は、ターンブル元首相のように、保守連合に属する人の間にも見られます。

これに対する君主制擁護派の反対論は、「英国王室との繋がりは豪州の歴史の一部。国民全体を統合する効果あり。これまでうまくいってきたものを性急に代える必要はない。」との議論です。ちなみに、皇太子時代のチャールズ（国王）は、「この問題は豪州人自身が決めるべき問題。」と公の場で発言していました。



ユニオン・ジャックを掲げる豪州国旗



豪州の共和制運動のロゴ

多文化共生主義（マルチカルチュアリズム）を奉じ、英国からだけではなく、他の欧州諸国、さらにはアジアや中東からの移民を広く受け入れて変遷してきた豪州社会。AUKUS の創設、英国との FTA 交渉に見られるとおり、英国が重要なパートナーであり続けることは言を俟ちません。また、「グローバル・ブリテン」を看板とするブレグジット後の英国にとって、インド太平洋地域への関わりを強化する上で豪州が最良のパートナーの一つであることも明らかです。

そうした中で、今後の豪州が英国王室とどのような関係を作っていくのか、注目されます。

山上信吾